

# 外国語学習とユーモア理解

菅 野 ゆ り か

## Foreign Language Learning and Understanding of Humor

Yurika Sugano

### 抄 録

異なる文化圏のジョークやユーモアを理解するのは簡単ではない。高コンテクスト社会と低コンテクスト社会のコミュニケーションスタイルの違いも一因であろう。しかしすべての社会に笑いはある。おかしいと思えない理由を探れば、自ずと「笑いとは何か」という問題に突き当たる。本稿では、まずこれまでの笑いの理論を整理し、ユーモアの性質を明らかにする。さらに授業で「笑い」を取り上げることが、学生の異文化理解の一体験としてどのような意味を持つのか、ドイツ語圏で広く知られている Lorient (ロリオ) の笑劇とドイツのジョークの鑑賞を通して、授業参加者のアンケート結果、および授業コメントと最終レポートの記述を手がかりに考察する。

**キーワード:** 笑い、ユーモア、コミュニケーション、高コンテクスト社会と低コンテクスト社会、異文化理解

(2011年10月1日受理)

### Abstract

It is not always easy to understand the laughter of people from another cultural and other social backgrounds and one might even be embarrassed by their jokes and humor. The reason for this phenomenon is probably the difference between High Context and Low Context levels in societies. However laughter itself is common to all cultures in the world. So we are confronted with the problem of understanding what laughter really is.

In this paper, I first outline the theory of laughter and explore the characteristics of humor. Secondly, I describe the result of a questionnaire on German jokes and of Lorient's comedies that were examined by the students in my class. The students have consciously become aware of their misunderstandings in "intercultural understanding". As a result their attitude has changed in a positive manner. I have found that exploring laughter has the potential to be helpful in foreign language learning.

**Key words:** laughter, humor, communication, High Context and Low Context levels, intercultural understanding

(Received October 1, 2011)

## 1. はじめに

外国語を学び目標言語圏に留学すると、様々なストレスやショックを受けるものだが、その一つに「笑い」がある。参加したゼミナールや語学クラスで、教師や級友の言うジョークに笑えない。ユーモアを的確に捉えられない。みな笑う中、一人笑いを共有できないさびしさは想像に難くないだろう。

それでは、外国語学習の教材として「笑い」を取り上げれば、当該言語圏のユーモア受信能力を育成できないだろうか。単純にそのように考えた筆者は、4年前から担当するドイツ語専攻3、4年生の演習で、笑いをテーマの一つにしてきた。教材としては、おもにLoriot（ロリオ）を取り上げた。Loriot（本名 Bernhard Victor Christoph Carl von Bülow）は、1923年ブランデンブルクに生まれ、昨年8月、87歳の生涯に幕を降ろした、ドイツ語圏では老若男女を問わず幅広い層にファンを持つ現代ドイツのコメディアンであり、イラストレーター、作家、俳優、監督、そして大学教授という肩書きを持つスーパーエンターテイナーであった。もちろんLoriotの他にも、大衆芸人のOttoやMichael Mittermeier、さらにテレビ番組で活躍するStefan Raabなど個性ある芸人はいる。しかしLoriotの場合、代表的な笑劇をYouTubeで鑑賞できるだけでなく、ドイツ語字幕付きのDVDが一般販売されており、それに対応する著作も出版されている。使用言語は主に標準ドイツ語であることから、学生が取り組みやすい。また彼が創造する笑いの世界は、その多くがごく日常的な人々の様々な生活場面を対象としており、当事者性が高いため、学生自身の持つ常識と当該言語圏の文化や社会規範との相違にも気づきやすい。一方でLoriotの笑いの真髄は、おもにちぐはぐなミスコミュニケーションと、言語コミュニケーションのもつれから生じる、ありそうであるはずのない展開と結末にある。コミュニケーションを必須とする私たちに「コミュニケーションとは何か」を問い、笑いの能力を与えられた私たちに「笑いとは何か」を問う、つまり作品の鑑賞を通して、読者は人間の生にとって普遍的な課題に直面する。こうした理由により、学生に様々な有意義な考察の機会を提供すると考えた。

本稿では、おもにO大学外国語学部外国語学科ドイツ語専攻3、4年生の演習、2011年度前期の授業の実践報告という形で、受講生33名が毎回提出したコメントシートと最終回の授業総括、最終レポートの記述を手がかりとして、外国語学習において「笑い」を扱うことの意義を考察する。次章では、学習者にも随時資料として配布した、笑いを巡る考察のアプローチ、笑いをもたらすもの自体の観察と笑いを見出す心の動きについて明らかにする。3章では、教材として扱ったLoriotの作品にあるユーモアの学習者の受け止め方の変化を扱うため、ユーモアに関する考察と、必要資料として対象作品を紹介した上で、学生コメントの統計を報告する。さらに4章では、学習者の異なる笑いの体験として、同時に筆者には実験として、授業を進める過程で授業参加者を対象に行ったドイツジョークのアンケートと大阪弁での鑑賞に言及する。

## 2. 笑いとは何か

### 2.1 笑いの考察

外国語学習者にとっては、その対象外国語の言語的知識、文化的知識が不十分であるために、当該言語圏の「笑い」を鑑賞するのは簡単ではない。中にはスクリプトを読み、文化的背景や常識を理解することで分かるものもあるが、それでもピンとこないものもある。その理由を探ろうとするならば、まず「笑いとは何か」という問題に突き当たる。

「笑い」に関しては、古くはアリストテレスの時代から、人間に生来備わった行為として哲学的、心理学的、文化・社会的に考察されてきた。<sup>1</sup>一方 Norman Cousins が、病気の克服という自らの体験で実証した「笑いの治癒力」が医学的、生理学的に注目されてからは、認知科学的な研究も進み、毎年のように「笑い」を解説する書籍が出版されている。授業参加者には、笑いを考察する際の切り口として、①人間が生物体として微笑んだり声を出して笑ったりする行為から派生する諸問題を考察する生物学的、生理的アプローチ、②集団や社会において、コミュニケーションや人間関係に、笑いがどんな機能を果たしているのかという問題や、社会構造や文化、時代の相違による笑いの観念の違いについて考察する文化、社会的アプローチ、③笑わせるもととなるものがどのような表現形式で機能しているのか、それが受け手にどのような認識をもたらすのかについて考察する心理学、文学的アプローチを提示した。また、何が笑いを生み出すのか、そのもととなるものを分析したものとしては、特に演劇を対象に検証し、笑いの社会的制裁としての機能を明らかにした、Henri Bergson の5つの分類<sup>2</sup>を紹介した。

### 2.2 笑いの受容

では、おかしな状況を見聞きした際に、私たちは何に基づいて笑うのか。井上は、笑いの理論として、以下の4つに分類している。①優越の理論（道徳的理論、悲劇的理論）②ズレの理論（対比と突飛さの理論、主知主義的理論）③放出の理論（精神生理学的理論）④心理的転位である（井上, 2004: 128）。

①優越の理論は、他人の愚行や不運、失敗を笑うものである。ゆえに侮蔑の形態の一つともなり、そこから慎むべきものであるという考え方が現れる。②のズレの理論は、物事に存在する一定のパターンに突如逸脱が起きる時、そこにある不合理、矛盾、不一致などに知的反応が起き、笑いが生じるとするものである。③は精神が緊張から急激に弛緩した時などに、蓄積された心的エネルギーが発散して笑いを生むという理論である。④はこれらの説を統一的に説明しようとしたもので、笑いを心理状態の突然の変化、愉快なものへの転位と捉える。精神分析と人類学を分析方法とする Eric Smadja は、四番目として、Bergson の理論（社会理論）を挙げている（スマジャ, 2011: 44）。それは①および②の理論を包含しているが、社会的意味を付与し、「象徴的懲罰」として「社会の統制に一役買う」（同上書: 47）ものだと定義し、別枠を与えているのである。いずれにしてもこれらの4つの理論は、互いに関連し合い補完的なものであると言える。

外国語の笑いに接するのは、異文化体験の一つである。社会の規範、常識が異なれば、優越感やズレを感知する違和感の基準が異なってくる例があるだろう。さらに、おもに①の理論を根拠にする笑いのみならず、②の理論に拠る笑いにさえも、より慎むべきものが存在するのではないかといった想像力、その上での新たな自制心が働く可能性もある。ここでの4つの笑いの理論は、言語、文化の壁を越えて共有できる笑いだけでなく、理解できない笑いに対しても、その受容のプロセスに与える影響を考察する際の指標として有用であろう。

### 3. Loriot のユーモア

#### 3. 1 笑いにおける普遍性とドイツ語圏の文化的精神的共有財産

Loriot の笑いがドイツ語圏のお茶の間の笑いとして定着していったのは、1976年に市民の日常を描いた Sketch (風刺の効いたミニ・ドラマ) がテレビで放映されてからである。当初は3年間で100作品以上という驚異的なテンポで放映されていたが (Tuma, 2006:64)、以後はペースダウンし、1983年に60歳の誕生日を祝うイベントとして新たな Sketch が放映されてからは、ほぼ5年おきに新作品が加えられるという形でテレビ番組の特集が組まれた。その間にドイツ再統一という歴史的転換を経験し、社会は大きな変化を遂げた。Loriot はちょうどその前後にあたる1988年と1991年に喜劇映画を、主演俳優を兼ね製作している。社会的激動の最中にありながらも、この二つの映画のトーンは変わることなく日常生活の中にある滑稽を映し出し、彼の Sketch は30年以上の長きに渡り、再統一後は旧東ドイツの人々も含め、広くドイツ語圏の人々に親しまれた。生涯に授与されたテレビ、映画、文学、演劇、地域社会における大小さまざまな賞は37個にもものぼる。今年の8月に老衰により他界した際には、新聞、雑誌で追悼記事が生まれ、Loriot 作品で演じられるおなじみのキャラクターにより「ドイツ人に、自分たちの滑稽さを見せ付けて笑いへと導いた」(Graff, 2011:12) Loriot の功績が讃えられ、それらは「永遠に不滅」であると謳われた (同上紙, 12)。これほどの著名人でありながら、彼の作品が広く各国語に翻訳されていないのは、一つには Loriot 自身の主張のためであろう。それは、あらゆる人間社会に存在する笑いの普遍性 (Allgemeingültiges) とともに、ドイツ語圏文化、社会に生きる人々が暗黙のうちに培ってきた「文化的精神的共有財産」(Allgemeingut) の上に、自身の笑いも成りたつ (Tuma, 前掲誌:62) というものである。また文学、演劇、音楽といった文化遺産が、いわゆる「E (シリアスな) 文化」と「U (娯楽) 文化」に峻別され (丸本, 2003:152)、研究対象としても、サブカルチャーとして下位にランクづけされてきた後者には、あまり目を向けられてこなかったことも一因であろう。

#### 3. 2 ユーモアとユーモアセンス

ゲーテ・インスティテュートの視聴覚教材の一つに Loriot の笑劇を集めたものがあり、その小冊子 (Steindl, 1995:5) では「ドイツでもっとも成功した、もっとも品格のある

Humorist である」という南ドイツ新聞に掲載された Lorient に対する評価を紹介していた (*Süddeutsche Zeitung*, 8. 3. 1991)。このユーモリストとはユーモア感覚を持つ人間のことであるが、そもそもユーモアとは何か。ユーモアは人を笑いへと誘う要因となるものであり、その中にはブラックユーモアなど攻撃性を含んだものや愉快で滑稽なもの、さらに優しさや情を込めたものなど様々なものがある。織田は、自然発生的に喜びや勝利感覚の感情を表す笑い以外の笑いを、ウィット、コミック、ユーモアの3つに分けて、それぞれ「人を刺す笑い」、「人を楽しませる笑い」、「人を救う笑い」と定義している (織田, 2010: 223) が、これら3つを、笑いの性質に特徴づけて分類するには無理があると思われる。このウィット、コミック、ユーモアには、訳語として「機知、とんち」「喜劇、戯画、漫画」「諧謔、洒落」などが当てられることもあるが、いずれも概念として翻訳の困難なことばである。しかし、ユーモア感覚とは「常識や固定観念の枠組みから意図して脱出し」(同上書: 212)、「自由な角度から複眼的に物を見ることのできる」(同上書: 213) センスであるという説明は間違いない。ユーモアセンスを持つ者が備えている能力とも言えよう。確かにそのセンスに優れている者は、人物や事物、ある物事やある状況からおかしみ、滑稽なものを容易に見出し、表現形式にのせて発信できる。しかしそのユーモアは、当然のことながら、意図するところを受信できる能力を持つ相手に理解されなければその真価が発揮されない。外国語によるユーモアを理解するのは、時に言語、文化の違いが障壁となるために確かに難しいが、受信できる相手を必要とするのは、同じ言語文化圏内であっても同様である。外国語を学ぶ過程で、学習者はすでに言語により意味世界の切り分け方が異なることや、言葉の翻訳が記号のように単純に置き換えのできないことを少なからず経験しているはずである。それは母語や自文化圏内では気づきにくい固定観念というものを意識する機会を与えられているということである。つまり外国語学習者は、個人差はあれ、上述のユーモアを理解するセンスというものが、より開発される途上にある、少なくともその入り口に立っているとは言えないだろうか。

### 3. 3 当初の Lorient の作品に対するユーモア受容

授業では、多くの Lorient の作品の中から、スクリプトを読めば、専攻生で二年目の学習者、非専攻生であれば一年間の基礎文法を習得し、初中級テキストを半年間学習している程度の言語能力でも、表現、話の流れを理解できるレベルのものを選び使用した。最初に、これまでの受講者の多く、そして今年の33人のうちでは29人が面白いと評価した笑劇「外国人のためのドイツ語」と、反対に33人のうち28人が「面白さがわからない」、3人が「少しだけおもしろい、クスッと笑える程度」と評した短いアニメーションの2作品を挙げ、学習者がそれらを当初どのように受け止めたのかを示したい。

「外国人のためのドイツ語　テレビ講座」

講師：中級の8課では、まず最初に不定冠詞と所有代名詞の違いを学びます。そして同時に動詞の現在人称変化を練習します。

(男性と女性が、一条まとわぬ姿でベッドに入っている)

男：お名前はなんとおっしゃるのですか。

女：ハイデローレです。

男：ハイデローレとは下のお名前の方ですね。

女：ええ、シュモラーというのが苗字です。夫はヴィクトールです。

男：私はヘルベルトです。

講師：強変化動詞と弱変化動詞の語尾は、現在形では同じになります。助動詞の *sein* と *haben* の使い方、数詞の使い方に注意してください。

女：私たちは自動四輪車を所有しています。私の夫は、電車で出勤します。

男：私は 37 歳で、体重は 81 キロです。

女：ヴィクトールの方が 5 歳年上で、1 キロ重いです。彼の電車は 7 時 36 分発です。

男：私の叔父の体重は 79 キロ、彼の電車は 6 時 45 分発です。

女：夫は正社員です。彼は 17 時 30 分まで働きます。

男：私には 3 人の従姉妹がいます。彼女たちの体重を合わせると 234 キロになります。

講師：さて、次は直説法の過去形にウムラウトをつけて接続法を作り、これまで学んだことを練習してみましょう。

女：もしヴィクトールが定期を持っていれば、18 時 45 分に帰ってくるのでしょうか。

男：もし私に 4 人の従姉妹がいれば、体重の合計は 312 キロになるのでしょうか。

(夫が寝室に入ってくる)

ヴィクトール：私がヴィクトールです。体重は 82 キロです。

男：私はヘルベルトといいます。私の電車は 19 時 26 分発です。

女：あれは私の夫です。

男：これは私のズボンです。

ヴィクトール：これは私の書類バックです。

(Loriot, 2003 : 131 – 132, 訳は筆者による)

場面は、落ち着いた懐古趣味の寝室である。二人の男女が枕を背もたれにして座っている。二人は微動だにせず正面を向いたまま交わしたのが第一のスキットである。多くの外国語学習は自己紹介と他者の紹介から始まるが、こうした設定で使われることはまずないだろう。ドイツ語も他のヨーロッパの言語と同様に、英語の *you* にあたる二人称代名詞が親称と敬称の二つある。互いに名前も知らないベッドの二人の会話は、敬称を使った、日本語で言うなら「ですます調」で、しかも外国人のためのドイツ語であるので、意識的に一単語ずつ、ゆっくり、はっきりと発音されている。続くスキットでは、この男女は互

いの顔を見て話しているものの、マネキン人形のように頭を動かさない。しかし二人の発話はすべて文法的には正しいドイツ語である。最後のスキットでは、女性の夫が現場に踏み込むわけだが、二人の男たちは女性の紹介によって互いに自己紹介をし、最後は夫が自分のアタッシュケースを掲げて二人に見せて終わるのである。言うまでもなく、ここには外国語教育に対する皮肉が透けて見える。言語はそれにふさわしい状況と文脈の中で使われてこそ、適切な意味内容を獲得し相手にメッセージを伝える。意図的に、想定され得るという状況を設定し、文法習得用に作成された会話をじょうずに真似るだけでコミュニケーション能力がつくのだろうか。そうした問題提起をされているように感じるのだが、これを授業で使用すると、聴き取りやすさと語彙、文法の単純さのために、学生たちに理解しやすい作品として受け入れられたというのも皮肉なものである。この作品の面白さについて、学生はおもに次のような理由を挙げている。複数の理由はそのままカウントしたため重複している。

「状況設定、会話がシュール」等 33人中27人

「テーマが知的、着眼点が鋭い」等 同24人

「現場の小道具や演出がうまい」5人

「皮肉を重ねて冷笑的」2人

次に、イラストはかわいいと好評<sup>3</sup>ながら、内容的には全体として理解されなかったアニメーションである。

「朝食のタマゴ」

夫：ベルタ！

妻：なんです？

夫：このタマゴ、固いな。

妻：(黙っている)

夫：このタマゴ、固いぞ。

妻：聞こえてます。

夫：このタマゴは、いったい何分ゆでたんだい？

妻：タマゴの食べすぎは体に良くないですよ。

夫：いや、僕は、きみがこのタマゴを何分ゆでたのかを聞いてるんだよ。

妻：あなたはいつも4分半ゆでて欲しいんじゃないの。

夫：そうだよ。

妻：じゃ、何を聞きたいのよ。

夫：このタマゴは4分半ゆでたものじゃなさそうだからさ。

妻：毎朝、4分半ゆでてるわよ。

夫：それじゃ、なんで日によって、固くなったり柔らかくなったりするんだ？

妻：そんなの知らないわよ。私、鶏じゃないし。

夫：何言ってるんだよ。それじゃ、タマゴがちょうどいいっていうのは、どうして分

かるの？

妻：4分半たって取り出すからじゃない、やあね！

夫：時計か何かで計るのか？

妻：勘よ。主婦は勘で分かるのよ。

夫：勘だって？その勘とやらで何が分かるっていうんだ？

妻：いつ半熟になるかじゃない。

夫：だけど、固いじゃないか。きみの勘、おかしいんじゃないのか？

妻：私の勘がおかしいですって？一日中キッチンに立ちっぱなしで、洗濯して、あなたのものを片付けて、部屋を掃除して、子供たちを怒りつけて。なのにあなたは私の勘がおかしいって言うわけ？

夫：はいはい、はいはい、タマゴを勘でゆでてるなら、4分半ちょうどっていうのは、ただの偶然じゃないか。

妻：4分半ゆでたのが偶然かどうかなんて、別にどうでもいいんじゃない。大事なものは、4分半ゆでたことでしょ？

夫：僕はね、半熟タマゴが食べただけなんだ。偶然、半熟になったものじゃなくて。何分ゆでたかなんて、どうでもいいんだよ！

妻：へえ、そうなの？じゃ、どうでもいいんだ、私がキッチンで4分半、忙しく歩き回ってるだなんてこと。どうでもいいってわけなの？

夫：違うよ。

妻：どうでもよくないわよ、タマゴは4分半ゆでなきゃだめじゃない。

夫：だから、そう言ってるじゃないか。

妻：さっきは、どうでもいいって言ったじゃない！

夫：僕は、ただ半熟タマゴが食べただけだよ…。

妻：何よ、男の人ってほんと幼稚ね！

夫：(つぶやく) 息の根を止めてやる。明日は息の根を止めてやる…。

(同上書：97-99, 訳は筆者による)

この「朝食のタマゴ」は、Loriotの著作『朝食のタマゴ』(*Das Frühstücksei*)の一話である。2003年に出版されたこの本には、Loriotのアニメーションと実写による、日常の生活風景やよく見聞きする物事にまつわる笑話が8つのジャンル別に収録<sup>4</sup>されている。

場面は夫婦の朝食風景。夫のゆで玉子が固かったことから、4分半と決めてあるゆで時間を巡っての押し問答となるのだが、会話は双方向で進められていくにもかかわらず、夫の質問に対する妻の答えの観点がかみ合わないため、最後まで夫は納得できずに会話は終了する。相手の言うことを聞いているようで、その意図を実は汲み取っていない。夫婦は相互に相手の言葉を受けて交替に発言しており、一見会話は成立しているように見える。つまり形式的には成り立っているコミュニケーションなのだが、実質的には成り立っていない。たとえ部分的にでも合意をし合い、協同で双方に納得のいく意味を構築できなければ



ば、対話とは言えない。こうしたすれ違いのコミュニケーションパターンは、Loriot が描くテーマの一つである。

この「朝食のタマゴ」の面白さに対して否定的だった学生の具体的理由は、以下のものである。

「しつこすぎ、ゆで時間にこだわりすぎ、同じネタを引っ張りすぎ」等 33人中25人

「長すぎる、ダラダラ感がある」等 23人

「ただの夫婦喧嘩で面白くない」 4人

「オチが突飛すぎて、理解できない」 2人

少し面白いという学生3人ですら「どこで笑っていいのかわからない」と感じていた。

次に、学生の評価が分かれた笑劇の例として、「母のピアノ」（同上書：57-62）と「スパゲティ」（同上書：9-12）のあらすじを提示したい。

「母のピアノ」の場面はパニスロフスキ家の居間。休日のコーヒブレイクを、妻、娘夫婦、彼らの双子の息子たちと過ごしているところに、アメリカに住む母親からピアノのプレゼントが配達される。そのピアノが居間に運ばれるまでの一部始終をビデオに収め、お礼のビデオレターを作成すべく、家族のセリフを含めて準備万端整えられていた。この一家の主人のシナリオによれば、出来上がるはずのレターは以下のような展開にならなければならない。本番収録直前に彼は家族に確認する。「それじゃ、みんな、打ち合わせどおりに。ママは手をたたいてからくまあ、これは何?」と叫ぶ、嬉しそうに。クラウス・ディーターとハインツ・ヘルベルトはく見えて、おじいちゃん、素敵なピアノだよ>で、ヘルガ、おまえは、何だったかな」間髪を入れず娘のヘルガが答える。「ピアノよ、ピアノよ!」どのように言うかの指示も含め、そのワンマンぶりと完璧主義はここですでに想像がつくのだが、この用意周到はそう簡単には実らない。一回めはピアノ運搬人二人だけが部屋に入ってきてピアノがない。家族のセリフは完璧だったのだが、当然やり直しである。その後運搬人にとっては迷惑千万の撮り直しが続くことになるのだが、依頼する父親の物腰も言葉も丁寧である。しかし撮り直しをするのであればと彼らに、妻の質問に答えて「これは、マサチューセッツに住むベルタ・パニスロフスキさんからのプレゼントです。」という言いにくいセリフを頼んだことから、結局は6回も撮り直すはめになる。家族の呆れつつも辛抱強く付き合う様子と、彼らを励ましつつ運搬人を気遣いながら立ち回る父親の苛立ちがおかしい。「調和あるドイツの一家庭の、居心地のよいコーヒブレイク。それっぽちのことなのに、私が何か求めすぎとでも言うのか?」と早口でまくし立てる父親の一人よがりの理想主義の結末はというと、ピアノを一瞥もせず面倒くさそうに聞いた妻の「あれは何?」に、「これはピアノ。パニスロフスキに住むベルタさんからです」という運搬人の対応の後、ケーキを食べ過ぎて気分が悪くなった孫たちと娘の気乗りのしない応答なのである。

パニスロフスキ家の主人は真面目で、周囲も悪意があるわけではなく冷静に反応している。こうした対比や、役者たちの演技の巧さは、33人中20人の学生が認めている。「こういう風に周りが見えてない迷惑な人はいる、日本にもかつてこんな親父はいた」に類す

る意見は、33人中7人から出た。しかし一方で、半数近くの学生から否定的なコメントが聞かれた。それらは以下のようなものである。

「6回も繰り返すのはしつこい」 16人

「ボケっぱなしでツッコミがないので、笑にくい」 14人

「ボケがワンパターンで飽きる、展開に意外性がない」 4人

学生たちはボケとツッコミという日本の漫オスタイルに慣れているためか、ツッコミのない手法に物足りなさを感じたのだろう。ある学生はLoriotの笑いは稚拙、日本の笑いのほうが精巧であると断じた。

同じく学生の評価が分かれた「スパゲティ」は、あるイタリアンレストランで、食事が終わった頃、Loriot扮する中年男が女性にプロポーズをする場面である。男性はナプキンで口元を拭うのだが、その際にスパゲティの切れ端が鼻の下に付着してしまう。それに気づかずに、男性は甘い言葉で女性に愛の告白をする。しかし、女性の目は鼻の下のスパゲティに釘付けで、空返事を繰り返す。女性の指摘で男性は口元をナプキンで拭き直すが、次は鼻の頭に、その後は指先に、眉間にとスパゲティの切れ端は移動し、最後は鼻からぶら下がって、食後のコーヒーを飲んだ際にカップの中に入りようやく取れる。その間男性は、自分は仕事ができ、人から信頼される人格であることをアピール、そして「何時間もういや何日もこうして君を見ていたい、こんな時、なんて言葉は無力なんだ」などと言いながら、間断なく喋り続ける。最後にコーヒーカップを覗き、スパゲティの切れ端が浮いているのを女性に見せると、クレームをつけるべくウェ이터を呼びつけ、この笑話は終わる。これも前述の「母のピアノ」と同様に、

「知的でたいそうな言動も、鼻のスパゲティが台無しで滑稽」等 33人中4人

「熱弁をふるう男性とスパゲティしか見ていない女性との温度差が面白い」 4人

「ウェ이터の凝視の表情が絶妙」 9人

「視覚的に印象深い、＜前歯に青海苔＞的な面白さで分かりやすい」等 13人  
といった肯定意見が出たが、5人の女子学生は、不快さ、気持ち悪さを指摘した。

## 4. 揺れ動く笑い

### 4.1 ドイツの笑い話、ジョークについて

授業のコメントシートには、毎回鑑賞した作品について面白い、面白くないだけではなく、なぜ自分がそう思うかを自由に書いてもらった。段階的に、何が笑えないのか、それをなぜドイツ語圏の人は笑うのか、その違いはどこから来るのかまで考察するように促した。随時、2章で提示した笑いとユーモアに関する書籍や論文を紹介し、日本とドイツ、高コンテクスト社会と低コンテクスト社会のユーモアやジョークの比較論などの資料も配布した。またドイツでよく語られる様々なジャンルのジョークを紹介し、面白いと感じたジョークのトップ3を全員に選んでもらうアンケート調査を行い、統計結果を知らせた(資料)。学校、教育、老人、仕事、職場、乗り物、宗教、サッカー、スポーツ、休暇、食事、

ドイツ人の地域性、有名人、動物などテーマは多岐に渡る。ドイツで市販されているジョーク集もあるが、原語だけではすぐに理解できない学生のことも考慮し、参考訳の併記された独学タイプのドイツ語教材、押野洋著『ジョークで学ぶドイツ語』から、筆者が短い会話形式のジョーク 33 個を選び出した。学生たちがもっとも面白いと感じたのは以下の 3 つであった。

- ・アダムとイブが楽園で散歩をしている。「私を愛してる？」と尋ねるイブ。「馬鹿なこと聞くな、他に誰がいるっていうんだ。」(押野, 2004 : 72, 訳は筆者による) 8人
- ・宗教の授業に先生は最後の審判について話す。「雷鳴がとどろいて稲光が走り、壁はすべて崩れ落ち、洪水がすべてを飲み込んでしまう。死者は墓穴から這い出て…」アンドレアが言った。「その場合、学校は休みですよ」(同上書 : 72) 7人
- ・娘の旦那は、娘がいつか私の全財産を相続するだろうというだけで、娘と結婚したんじゃないかな。「どうしてそう思うの?」「やつは私と握手する時、いつも私の脈を取るんだよ」(同上書 : 46, 訳は筆者による) 7人

宗教にまつわるジョークに人気が出た理由は、「ドイツ人は敬虔なクリスチャンというイメージを持っていたので、意外で新鮮だった」、「日本にはあまりないので興味深い」などである。ステレオタイプ的な言い方になるが、実直で真面目、ユーモアを解さないなどと言われるドイツ人も、日常会話ではユーモアで場を和やかにし、知的ニュアンスを加えるべく、好んで短いジョークを披露する。けれども日本人、特に関西人が、会話中に笑いを取ろうと当意即妙なジョークをさらりと挟み、第三者の拾い、気の聞いたツッコミを期待するのとは違い、ドイツでは「予告してジョークを言う」(ワインガートナー, 2009 : 355) 傾向があるという。また、低コンテクスト社会の欧米では、「初対面の人にもアイスブレイカー的に使われる」(大島, 2009 : 323) ジョークだが、日本のような高コンテクスト社会では「仲間同士の連帯感を深めたり、共通認識を確かめたりすることに使われる」(同上書 : 325)。このように使用の仕方は違うものの、ジョーク自体はどこ国が発祥か分からないものも多く存在し、他の文化圏でも似たようなジョークに出会うことも多い。「こんな話を知っている?」というように人から人へと伝えられた結果、ジョークは世界を旅するようである。今回のアンケート結果によれば、人気のあったジョークでも 8 名、誰一人選ばなかったものは 9 個あったが、残り 24 個のジョークについては、少なくとも一人はベスト 3 のいずれかに選んだ訳であり、統計結果にはばらつきがあった。学生たちは、笑いのツボには当然個人差があると認識する一方で、以下のように、他者がどう感じたかを気にするコメントもしており、自分が所属集団に溶け込んでいるのかどうかをチェックしようという気質が見て取れる。「自分が選んだものは誰も選んでいない (落ち込みを示す矢印)」「自分の笑いのツボは人と違う? (汗をかいた顔文字)」等が合計 4 人、「自分の笑いの感覚は、他のみんなと比較的同レベル」、「笑いの好みが他の人と似ていて安心」といったコメントをしたものも 4 人いた。自分が所属する小集団の中で笑いを共有できるかどうかは、日本のような典型的な高コンテクスト社会の中では侮れないということだろうか。ドイツ人は日常会話にお得意のジョークを投じて笑いを創出し、コミュニケーション

を和やかにしようとする傾向があるが、日本人の間では、実際の会話の流れの中で使われる言葉や態度、状況などをもじるなど、自分たちが当事者である場当たりの笑いが発生する。娯楽としての笑いを鑑賞する際にも、同様の笑いを求めやすいのかもしれない。Loriot の笑話でも、「そこに居合わせたら不愉快」等の女子学生のコメントには、こうしたいつのまにか当事者になってしまう傾向が如実に現れているといえる。

## 4. 2 大阪弁での鑑賞

Loriot の笑いに対しての様々な意見を、どのようにフィードバックしていけばいいのか。参加者が 33 人もおり、毎回すべてのコメントを紹介して相互に意見交換する時間はほとんど持てなかったため、授業も中盤を過ぎた時分にそれまでに提出してもらったコメントを整理して、Mr. A、Ms. B のように匿名にし、プリントして全員に公開した。他者の異なった意見をそれぞれが読んだ上で、5、6 人のグループに分かれてグループディスカッションを行った。原則としてドイツ語で行ったが、補助的に日本語を交えても、反論は難しかったのだろうか。6 グループのうち、なんと 5 グループで同じような結論に落ち着いてしまった。「ポケがワンパターン」、「ツッコミがない」、「今の笑いに必要な勢いがない」「食べ物ネタが下品」、「笑いが古い」などの否定意見が優勢となってしまう、面白さや魅力を感じていた学生も、それを擁護しながらスマートな反論をすることができなかったのである。その後の個人コメントによれば、「みんなが否定的だったことに内心驚いた」学生は 9 人もいた。説得的に話せないという戦術的なことも理由の一つであろうが、同調に傾きがちな日本のコミュニケーションスタイルから臨機応変に抜け出す練習が必要なようである。

ディスカッションを経て、特に否定的に見ていた学生たちの見方が固定しつつあると思われた 14 回めの授業で、彼らの「結論」を再度見つめなおす機会を提供すべく、3.3 で紹介した「朝食のタマゴ」の大阪弁バージョンを、アニメーションに合わせて、大阪出身の学生二人に声優として演じてもらった。オリジナルのドイツ語による鑑賞では、彼らの「笑いのレベル」に照らし評価の低かった作品、およそユーモアを感じなかった作品が、大阪弁というなじみの言語で語られると、いかに変わるかを体験してもらうためである。以下が大阪弁バージョンであるが、3.3 の標準語訳とは、テキストレベルで比較しても印象は異なるであろう。

夫：ベルタ！

妻：なに？

夫：この玉子、固いで。

妻：(沈黙)

夫：この玉子、固いって！

妻：聞こえてるわ。

夫：これ、何分ゆでたん？

妻：玉子の食べすぎは体によくないで。

夫：や、何分ゆでたんか、聞いてんねん。  
妻：あんた、いつも4分半にせーって言うてるやん。  
夫：そうや。  
妻：ほんなら、いったい何を聞きたいん？  
夫：この玉子は、4分半ゆでたんとちゃうやろ？  
妻：毎朝、4分半ゆでてわ。  
夫：そんなら、日によってなんで固なったり、やらかなったりすんねん。  
妻：そんなん知らんわ。うちは鶏やあらへん。  
夫：あほか。ほんなら、なんで玉子がええ具合で分かるんや？  
妻：4分半ゆでて、取り出すからやない、あんたこそ何言うてるの。  
夫：時計かなんかで計るっちゅうんか？  
妻：おおよその勘や。主婦は、そんなん勘でわかんねん。  
夫：勘？その勘で何が分かるんや？  
妻：いつ半熟になるかやん。  
夫：でも、固いやん。おまえの勘、変なんちゃうか。  
妻：うちの勘が変て？  
    一日中キッチンに立ちっぱなし、洗濯して、あんたのもん片づけて、部屋掃除して、子供ら怒鳴って、そんでうちの勘がおかしいってあんた言うんや。  
夫：はい、はい、はい、はい。玉子を勘でゆでるんやったら、4分半ちょうどゆでた言うんは、ただの偶然やん。  
妻：4分半ゆでたんが偶然やったかなんて、あんたにはどうでもええんやろ。  
    肝心なんは、4分半ゆでたってことやん！  
夫：おれは半熟玉子が食べたいだけや。偶然半熟になったもんやなしに。何分ゆでたかなんてどうでもええわ！  
妻：そうなんや、どうでもええんや。ほな、うちが4分半キッチンでせわしくしとつても、あんたにはどうでもええってことなんかい！  
夫：ちゃうって…  
妻：どうでもええことなんかない、玉子は4分半ゆでなあかんのちゃうの…。  
夫：せやし、そう言うてるやんか。  
妻：さっき、あんたはどうでもええて言うたやん！  
夫：おれはただ半熟玉子が食べたいだけや…。  
妻：何やねん、男ってほんまに幼稚やわ！  
夫：(つぶやく) 首しめたる、明日こそ首しめたる…。

(Lorior, 前掲書：97-99, 訳は筆者と大阪出身学生による)

この上演は大好評で、教室は和やかな笑顔と笑い声で満ちた。ドイツ語で見た時には、スクリプトで内容を確認してからも、わずか2、3人がクスッと笑いをこらえた表情をし

たにすぎない。コメントシートにおいても、大阪弁バージョンには実に31人が面白いと評価した。何故か。そのうち約半数の15人の学生が「大阪弁の魔力」を理由に挙げた。具体的には「漫才を聞いている時の感覚になる」、「親しみやすいものになっている」、「お笑いでなじみの言葉なので、聞く側に笑う用意ができていいる」等の意見が多かった。

なぜおかしかったのだろうか。笑うのは「おかしい」という感情の表出の一つであるが、笑わないことも選択できる。また上述の例のように、以前におかしいと感じさせなかった内容の作品が別の条件や状況のもとではおかしく感じ、笑いに誘われることもある。笑いは受け手の心情によって揺れ動き、場を共有する者に伝播するのである。一方、日本人は言葉の響きで情景を思い浮かべる特有の言語感覚を持っている(苧阪,2010:87)という。<sup>5</sup> その好例がおびただしい擬声語、擬態語の存在<sup>6</sup>である。例えば、日本で生まれ育った人なら、ヒリヒリ、ピリピリ、ビリビリと聞くだけで、それぞれが何を形容するのか、どのような状況に用いるかの共通認識がある。その音声を聞くだけでおおよその文脈が想像できる。また「ヨタヨタ」などの擬態語を聞いただけで、人が歩いている情景を絵画のように思い描くことができるという。通常は言葉を聞くだけでは活性化することのない脳の「視覚領域が活性化する」(同上書:67)のである。この日本人に特有の言語処理は、日本語の多様な擬態語により開発されたものではないかと仮説を立てている。この説に基づけば、関西弁での「おっちゃんとおばちゃん」の会話の響きも、私たちの共通認識やある種のイメージを彷彿とさせるとは言えないか。大阪やその近郊の人間にとっては地元の言葉ゆえの親近感もあるだろう。しかし授業参加者の三分の二は関西以外の出身である。関西人でない者でも、今や吉本興業の芸人たちが発信する笑いのスタイルはお馴染みであり、後者の方がむしろ「関西弁の会話=おかしい」という公式を作りやすいかもしれない。おかしさの感覚は受け手の心的状況に左右される。緊張が緩和され、しかも笑いを期待しているような状態であれば、内容がそれほど面白くなくても笑ってしまうだろう。異文化の土壌で培われた異質のものは理解し難いものとして、初めから構えてしまう姿勢の影響というものを感じざるを得ない。

## 5. まとめ

### 5.1 学習者の最終コメントと最終レポートから

学生たちは最終的に、Loriotの笑い、外国語によるユーモア理解をどのように捉えたのだろうか。また、授業で笑いを取り上げることで得られたものは何なのか。最終授業では、毎回提出していた授業コメントを読み直し、最終コメントと比較して自分自身の変化について総括としてまとめる課題、さらに1カ月前に提示していた「Loriotの笑い」をテーマとした最終レポート提出を課した。彼らの総括とレポートの記述から汲み取れるものは、おおむね以下の4点にまとめられる。それぞれに学生の記述例を示す。

#### 1) 好奇心、学習のモチベーションを高める

- ・視聴覚教室で行ったため、たくさんの映像を楽しめた。

- ・ドイツ語をもっと勉強してドイツ人と同じ目線で笑えるようになりたい。
  - ・授業で生のお笑いに接するのは刺激的だった。他のタイプの笑いも是非見てみたい。
  - ・ドイツに行く前に、ドイツの笑いの予備知識が得られてよかった。
- 2) 笑いのコミュニケーションスタイルに対する気づきを促す
- ・ツッコミのない天井（かぶせ）という漫オスタイルは日本にもある。せっかちな関西人より関東人が好むかもしれない。ドイツにも笑いの地方性があるのか気になる。
  - ・アメリカの喜劇などもボケそのもので笑わせる。日本のツッコミというスタイルがむしろ特殊なのではないか。
  - ・ジョークを披露するのは、日本で怖い話を披露するのに似ているかもしれない。日本では男性が好んで、欧米でもどうなのか、男女差を調べてみたい。
  - ・日本では、公式的に笑いを生む空間では爆笑を誘うほどのユーモア表現がふんだんに使われるが、日常的空間では、関西は別としてあまり使われない。ドイツやアメリカではその逆で、お笑いの空間では安定したお決まりの笑いを好むように思う。
  - ・「お約束」という「予定調和」に笑いを誘われるドイツ人には、何事にもきっちりしたものを好む気質が表れているのではないか。
  - ・日本のコミックスは世界の各地で人気らしいが、ウケルところは日本人と同じなのか。
- 3) Lorient の笑いを別の角度から捉え直す
- ・むしろツッコミ役を置かないことで、ドイツ人の真面目気質への風刺を際立たせているのではないか。
  - ・Lorient を大阪弁にただけで、受け入れ方がこんなに変わるものだとは思わなかった。
  - ・低コンテキスト社会だから笑いの共有には「しつこさ」が必要なのかも知れない。
  - ・独りよがり融通の利かない人を笑いものにして批判している。教育的意図がある。
  - ・笑いの中に社会的要素がある。日本で今、人気の笑いにはそれがあるだろうか。
  - ・人間の愚かさを愛おしいものと感じている。Lorient の笑いは人間賛歌ではないか。
  - ・笑いが古い。それにもかかわらず人気があるのは、使い捨ての日本人とは違い、物を大切にすドイツ人の気質とも関係があるのではないか。
- 4) 異文化理解、他者理解に関する気づき、自明なことへの再考を促す
- ・違和感、共感の感性が違うため、笑いの文化の優劣などは容易に言えない。
  - ・不愉快感も社会や文化の違いから生じる。異文化間で摩擦が生じるのは笑いだけではない。自分とは違う価値観、感覚が存在するということを忘れてはいけない。
  - ・食事のマナーはドイツにもある。でもドイツでは、自分とは無関係の世界としてユーモアを描く。「自分が居合わせたら不愉快」という発想はあまりないのではないか。
  - ・自分とは違う価値観に触れてこそ、自分の価値観を再認識できる。
  - ・違いばかりに注目せずに、共通点にも目を向けたい。個人レベルの笑いもある。多様性を認めることが、他者を尊重することにつながる。
- 1) は、必ずしも「笑い」をテーマにしたものだから得られたというわけではなく、真

正テキストを使用すること、DVD といった視聴覚を活用することの効果も、特に目新しいものではないだろう。2)、3)、4)の中には相互に関連する意見もあるが、2)と3)では、特に当初、否定的評価をしていた学生の変化が注目に値する。また4)の意見には、異文化理解に必要な態度がうかがえないだろうか。外国語教育における Landeskunde (社会文化学習)の重要性を説く藤原は、Seelye が異文化を捉えていくプロセスの記述に注目し、「認知的な面だけでなく、情緒的な面が重要」であり、「自分も相手も社会の習慣に影響を受け」、「与えられた選択肢の中から自分の欲求を満たせるものを選んである行動を選択している」ことに気づくことの意義を挙げている(藤原, 2004: 142)。また笑えない理由を「文化の違い」でおしまいにしてしまう「文化還元主義」や、「私は日本人なので日本の笑いの方が分かる、日本の笑いは精度が高い」といった当初の考え方の中に存在する「自文化対異文化」のような「二項対立的、対照的」に捉える視点(丸山, 2007: 196)に対して、今一度再考しようという態度は、体験を糧にすることで育つ。例えば「笑いのツボも個人差がある。自文化といっても多様」という考えの根底を問いただせば、「文化とは何か、そんな画一的、均質なものではないはずである」といった問い直しに導かれる。そして「異文化理解」という概念を用いる際、異文化間の「差異」ばかりに注目し、「共通性、類似性」をどこかに置き忘れていないかというクレーマーの主張する一説<sup>7</sup>にも耳を傾けられよう。常識を鵜呑みにせずに自明だと思われていることを再度別の見地から捉え直し、コミュニケーション活動によって新たな意味を構築していく能力は「批判的思考力」と言い換えることができる。外国語教育において「笑い」「ユーモア理解」そして「異文化理解」自体に対するメタレベルの考察とともに作品を鑑賞していくことは、学生に、この「批判的思考力」を身につける貴重な機会を提供するのではないか。

## 5. 2 今後の課題

本稿では、笑いとユーモアの性質を明らかにしたのち、教材として用いた Lorient の作品を例に、学生の笑いの受容プロセスを検証し、外国語授業でユーモアを取り上げることの意義について、学生のコメントと最終レポートを手がかりに考察した。筆者の実際の授業は、もう一つの課題と並行する二本立てである。その課題とは、ドイツ文化事情の短いテキストを暗誦し、説得的に語るというものである。毎回授業の冒頭で3、4人が順番にスピーチを行い、聴き手は良い点と改善点を具体的に書く。そのようにして全員のスピーチに学生同士で相互評価をしてもらう。プレゼンテーションの実践練習を通して、ドイツ語の発音やイントネーションよりも、声の大きさ、間合い、視線、表情、姿勢など、おもにノンバーバル・コミュニケーションスキルを学び合うことを主旨としている。そして後期の各自の自由テーマによる、聴き手を引き込むスピーチに繋げるものであるが、90分という限られた時間内で、スピーチとユーモア考察の二つの課題を授業に盛り込むのは欲張りすぎかもしれない。しかし、学習の場は授業だけではない。学習は時と場所に限定されることなく、無限の広がりを持つものである。実際に学生たちは、異なる課題間に相互関連性、補完性を見出すこともある。教室内とはいえほとんどの発表者は緊張を体験する。笑いは緊張の



緩和である。発表を終えたある学生は、「スピーチはかなり緊張して、途中頭が真っ白になった。今日は特に Loriot の笑いに癒されたと感じる」と、単純なレベルではあるが関連づけたコメントをする。教材や題材は一素材であり、授業はその方法や形態により、いかようにも構築の可能なダイナミックさを内に持つ。異文化圏の「笑い」に触れ、ユーモアの受容に関してアンテナを広げること、さらに「一見関連のない概念間に共通性を見出すしなやかな思考」(苧阪, 前掲書:16-17)<sup>8</sup> は、ユーモアのある発話や聴き手の心を捉えるスピーチをしようという「発信能力」の育成にも一役買うのではないか。この相互関係も、今後可能な限り実証していきたいと考えている。

### 註

- 1 プラトン、アリストテレスの古代ギリシャ時代から 20 世紀に至る哲学者、生物学者、社会学者等の笑いの考察史は『笑い』(スマジャ, 2011: 16-42) に詳しい。
- 2 Bergson は、1900 年に書いた著書『笑い』のなかで、笑いを生むもととなる「おかしみ」を、①形のおかしみ、②運動のおかしみ、③状況のおかしみ、④ことばのおかしみ、⑤性格のおかしみの 5 つに分類し、相互の関連性を探り当て、「こわばり」が「滑稽」へと変容していくプロセスを明らかにした(ベルクソン, 1991: 11-182)。意味内容や目的を持つはずの言動、行動が「こわばり」つまずくと、肝心の意味内容を置き忘れ、お決まりの動きや入れ物、つまり形式だけになってしまう。その「ぎこちなさが滑稽なのであり、笑いがその罰となる」(スマジャ, 2011: 42) のである。
- 3 登場する団子鼻でずんぐりした、似た体型の中年夫婦は彼のアニメーションのトレードマークであり、ドイツ語圏の人々にはお馴染みである。
- 4 1) 人間どうし 2) 家庭 3) 夫婦の生活シーン 4) 成人講座 5) 政治経済 6) 科学、技術、交通 7) 動物というもの 8) 文化とテレビの 8 つであるが、「外国人のためのドイツ語講座」は 4)、そしてこの「朝食のタマゴ」は 3) の中の一話である。
- 5 苧阪は、人が様々なおかしさを感じする際の脳の活性化領域を、事象関連電位 (Event-related potential: ERP) という脳波を用いる実験装置や、機能的磁気共鳴画像法 (functional magnetic resonance imaging: fMRI) という空間装置を用いた実験により、解明を試みた。言語的ユーモアを理解し笑いに導くには、情動と関わる脳の各領域と知性と関わる各領域が複雑に呼応し合い、特にワーキングメモリによる保持と処理がバランスよく実行されなければならないことを明らかにしている(苧阪, 2010: 17, 18, 26, 54, 60)
- 6 金田一(1988:195, 255-257) は、この二つに加えて「イライラする」、「ムシヤクシャする」などの「擬情語」を列挙し、これが日本語に特有のものと指摘する。擬声語は他言語にもいくつか存在し、擬態語は中国語に認められるが一般に多用されることはなく、日本語の擬声語、擬態語、擬情語に関しては、いくらでも創作可能で生み出され得る点が特徴的であると述べている。
- 7 クレーマー(2007: 47) によれば、むしろ世界は「グローバル化」という概念のもとに、西洋資本主義的価値観による豊かで快適な「地球都市」が増殖し、長く培われてきた多種多様の土着文化を飲み込み、「同質化、均一化」傾向にあるという。
- 8 ユーモアや笑いを導く心的過程が、記憶や理解力を高めることに貢献するという、一般的教育的効果に言及している。

### 引用文献

- Bergson, A. (1900) *Le rire Essai sur la signification du comique*. Paris : Editions Alcan  
(アンリ・ベルクソン、林達夫訳 (1991) 『笑い』 東京、岩波書店)
- Cousins, N. (1979) *Anatomy of an Illness as Perceived by the Patient*. New York : Norton  
(ノーマン・カズンズ、松田銑訳 (1996) 『笑いとお癒力』 東京、岩波同時代ライブラリー)
- Graff, B. (2011) „Loriot kann es. Sonst keiner.“ In *Süddeutsche Zeitung*. p12 München : Süddeutsche Zeitung GmbH
- Loriot (2003) *Das Frühstücksei*. Zürich : Diogenes
- Smadja, E. (1993) *Le rire*. Paris : P.U.F.  
(エリック・スマジャ、高橋信良訳 (2011) 『笑いーその意味と仕組み』 東京、白水社)
- Steindl, M. (1995) *Zu Bildschirm 28 Sketch und Humor von Loriot*. München : INTER NATIONES
- Tuma, T. (2006) „Es geht nur noch ums Geld.“ In *Der Spiegel*. Nr. 56 p62 – 66 Hamburg : Spiegel Verlag
- Tuma, T., Wolf, M. (2011) „Du dödli di. Weshalb Vicco von Bülow alias Loriot der größte deutsche Künstler der Gegenwart war.“ In *Der Spiegel*. Nr. 35 p29. Hamburg : Spiegel Verlag
- 井上宏 (2004) 『笑い学のすすめ』 東京、世界思想社
- エリック・M・クレマー (2007) “地球都市の出現とコミュニケーション” 伊佐雅子監修 『多文化社会と異文化コミュニケーション』 東京、三修社
- 大島希巳江 (2009) “高コンテクスト社会と低コンテクスト社会のコミュニケーションにおけるユーモア” 日本笑い学会編 『笑いの世紀』 大阪、創元社
- 荳阪直行 (2010) 『笑い脳 社会脳へのアプローチ』 東京、岩波書店
- 押野洋 (2004) 『ジョークで学ぶドイツ語』 東京、三修社
- 織田正吉 (2010) 『笑いのこころ ユーモアのセンス』 東京、岩波書店
- 金田一春彦 (1988) 『日本語 新版 上』 東京、岩波書店
- ティル・ワインガートナー (2009) “予告されるジョーカー日本人とドイツ語圏人のジョーク比較” 日本笑い学会編 『笑いの世紀』 大阪、創元社
- 藤原三枝子 (2004) “外国語教育における文化社会学習” 板山真由美ほか編 『学習者中心の外国語教育をめざして』 東京、三修社
- 丸本隆 (2003) “日独の舞台に笑いはあるか—二つの「遅れてきた国」を比較する” 新井裕、市川明ほか 『ドイツの笑い・日本の笑い』 大阪、松本工房
- 丸山真純 (2007) “「文化」「コミュニケーション」「異文化コミュニケーション」の語られ方” 伊佐雅子監修 『多文化社会と異文化コミュニケーション』 東京、三修社

## 資料

ドイツジョーク	アンケート結果			(2011年6月30日)
	1位	2位	3位	計
1. 父兄の授業参観	3	4	1	8
2. 落第	1	3	1	5
3. もう一人の言行不一致親父	1			1
4. ハエと公務員	1	1	2	4
5. 働き者 vs 怠け者				0
6. 財産目当てで結婚?	2	6		8
7. 役にたたぬシェパード	1	2		3
8. 犬の尾でわかる住居の狭さ		2	2	4
9. アウトバーン開通	3	4		7
10. トラバント		1		1
11. 宗教の時間	4	3	1	8
12. アダムとイブ	5	2	1	8
13. アダムとイブ その2	1	1		2
14. 復活祭の卵		1	1	2
15. 説教中に気になること				0
16. 告解	1	1	1	3
17. 男が自らの卑小さを感じる時		1	1	2
18. かわいそうなロビンソン・クルーソー	1	2	3	6
19. 嫌な乗客へのスケールの大きな仕返し		3	1	4
20. 使いまわしの爪楊枝?	1	1	1	3
21. 中華料理を食べて				0
22. ツークシュピッツェ				0
23. シュヴァルトツヴァルト		1		1
24. バイエレン vs ハンブルク				0
25. ハンブルク				0
26. 天国:地獄=ヘブライ語:ドイツ語		2	1	3
27. 南フランスの巡礼地 ルルド	1			1
28. 3B ブンデスリーガー				0
29. ボクシングを实践する妻	1	1	1	3
30. 剣術士達の模範試合			1	1
31. オーシャンビュー			2	2
32. 部屋00				0
33. カメラ狂の旅行者				0

3つの選択のうち、特に順番をつけられないというものはすべてを2位にカウントしている。